

泉屋博古館 企画展プレスリリース

歌と物語の絵 — 雅やかなやまと絵の世界

2023年6月10日(土)－7月17日(月・祝)



泉屋博古館

SEN-OKU
HAKUKOKAN
MUSEUM

「歌と物語の絵 ー雅やかなやまと絵の世界」 展覧会概要

古来、語り読み継がれてきた物語は、古くから絵巻物など絵画と深い関係にありました。和歌もまた、三十一文字の世界が絵画化されたり、絵から受けた感興から歌が詠まれたりと、絵画との相互の刺激から表現が高められてきました。

物語絵や歌絵の特徴のひとつは、繊細な描写と典雅な色彩。宮廷や社寺の一級の絵師が貴人の美意識に寄り添い追求した「やまと絵」の様式を継承することでしょう。そして、ストーリーに流れる時間を表すかのような巻物、特別な場面を抽出してドラマティックに描き出す屏風など、長大な画面にさまざまな表現が生まれました。

古典文学は、後世の人々が自身に引き寄せて味わうことで、読み継がれ輝き続けてきました。それに基づく絵画もまた同様です。本展では、近世の人々の気分を映し出す物語絵と歌絵を、館蔵の住友コレクションから選りすぐってご紹介します。

雅やかで華麗、時にちょっとユーモラスな世界をお楽しみください。

【みどころ】

1. 住友コレクションのやまと絵を一挙公開。

当館が所蔵する住友家歴代収集の日本絵画には、繊細な描写と典雅な色彩を特徴とする絵巻・屏風の作品群が含まれます。それは、平安時代より培われてきたやまと絵の領域が一気にひろがった桃山から江戸時代前期（17世紀頃）のものです。かつて一部の貴人のためだったやまと絵は、より広い階層にむけて一段と親しみやすく視覚効果の高いものへ生まれ変わっていったのです。

2. 知っているようで知らない古典文学。

江戸時代の親しみやすい絵画を通じて、一步近づく。

江戸時代の人たちだって、みなが全編読破していたとも限りません。挿絵入りのダイジェストやパロディ本も人気がありました。屏風や掛軸には特に印象的な名場面が選ばれ、その時代ならではの好みや解釈も反映されています。それらに親しむうちに、いつのまにか文学の根底にある普遍的な人生の機微に引き寄せられていく――古典文学が読み継がれてきた理由はそのあたりにあるのでしょう。

3. 細部こそ見せ場！高精細画像で心情・風情に迫る。

絵巻は手で、屏風は座敷で、ともに間近に鑑賞されたやまと絵は、細密な描写こそ本領ともいえるでしょう。文化財用高精細スキャナーで撮影した3点の物語絵屏風の拡大画像を会場にご用意しています。ガラス越しでは見つけにくい表情や仕草、四季折々の自然など、ひとたび目にすれば古典文学にぐっと近づけることでしょう。

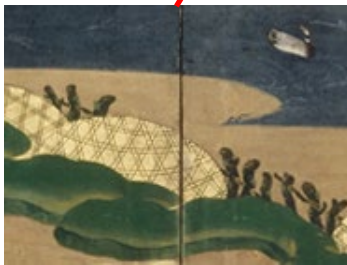
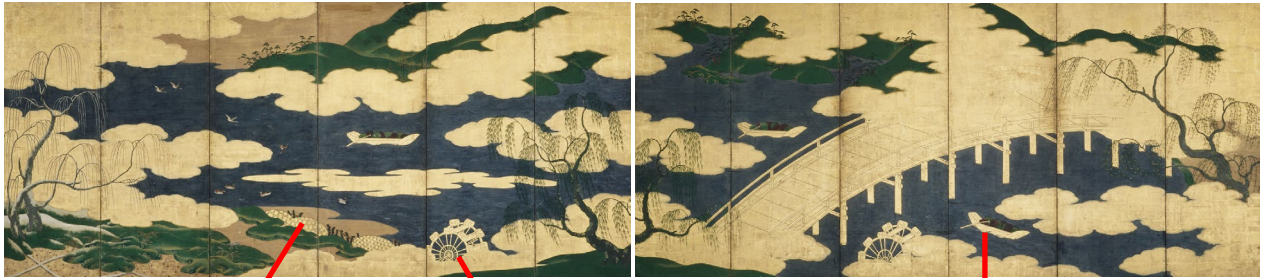
1. うたうたう絵

◇ 屏風にひろがる歌枕のイメージ

歌枕とは古来、和歌で繰り返し詠まれた地名のこと。実際の景観よりも、数々の和歌のなかで培われたイメージが重視され、名所絵もまたその観念的な世界を描くものでした。

今回展示する《柳橋柴舟図屏風》はそういった歌絵の典型例です。

《柳橋柴舟図屏風》江戸・17世紀



蛇籠と網代木
蛇籠は、竹を編んで石を詰め
水を防ぐ装置。網代木は魚を
とる網を固定する杭



水車



柴舟といえば宇治！
柴を刈りだして出荷する舟

どこにも人が描かれていない！

実在の地でありながら、和歌で詠まれたイメージの中の
空想の地としてとらえ、観る人の想像が羽ばたくよう、
あえて人を描いていないのです。

向こう岸に山並みを望む大きな川の流れ、そこにかかる金色の橋。この見渡すような雄大な風景は一般的な川を表すようですが、「川、橋、山に、柴舟、網代木（杭）」と見れば、古来、宇治が連想されました。

京都から少し離れた宇治の山里は、古代より寺社がたたずみ、貴族の別荘が営まれました。そこに橋姫の伝説や源平合戦の逸話、さらには「うじ＝憂し」といった地名の響きからの連想まで折り重なって、名所歌枕としての「宇治」のイメージが形成されました。

この屏風に描かれているのもそういったイメージの景色です。一見どこでもない普遍的な景観ですが、いにしえの人は瞬時に宇治を想起し、数々の名歌からさらに想像をふくらませたことでしょう。

1. うたうたう絵

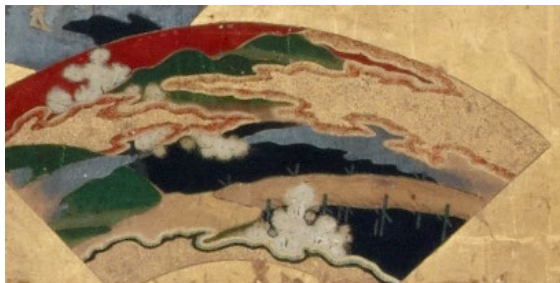
◇ 扇に描かれた和歌 ― 機知に富む解釈、大胆なデザイン

身近に携帯し、時に贈答にも用いられる扇は、小画面ながらもそれぞれにひとつの世界が成立しています。和歌の感動をそのまま絵画化するもの、言葉遊びでわざと意味をすり替えて奇想天外な光景を描くもの。それぞれの小宇宙が、屏風の桜咲く水辺にちりばめられています。近寄っては機知に富む歌絵を楽しみ、引いては華麗にデザインされた空間を楽しむ ― 扇面散らし 屏風の楽しみは尽きません。

《扇面散・農村図屏風》（右隻）江戸・17世紀



名歌の情景を華麗に
高嶺に咲き誇る桜花に
憧れる気持ちを詠んだ和歌。
遠く雲間に山々と桜が
見え隠れする雄大な風景を
鮮やかに表します。



山高み雲井に見ゆる桜花
心のゆきて折らぬ日ぞなき

凡河内躬恒（古今集）

だじやれの解釈から広がる
シニールな世界

和歌のなかの一句「かのつの舟」。
普通なら「彼の（あの）津の舟」
とみるところを、おなじ発音の
「鹿の角舟」にすり替えています。
その結果、描かれたのは
鹿の角に乗って浮かぶ小さな人間。
それとも鹿の角が巨大なの？

風もなし雲のけしきも良かりけり
かのつの舟の出てやすららん

詠み人しらず



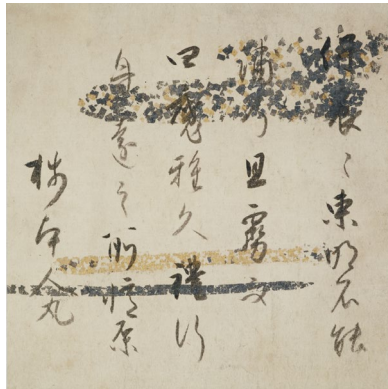
1. うたうたう絵

◇ 神か人か ――三十六歌仙の絵すがた

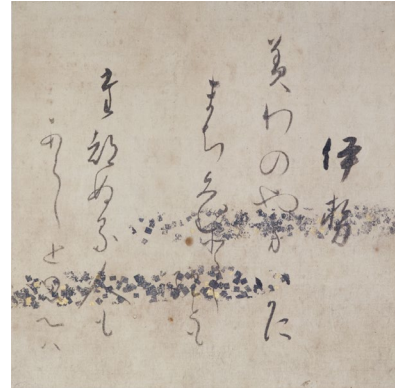
「歌仙」とは歌の神様。古代の和歌の名手を尊崇して称することばで、「三十六歌仙」は平安時代中期に藤原公任がそれ以前の歌人を選んだものとされます。

本来、威儀をただした神聖な姿で描かれた歌仙ですが、中世以降、より自由な表現がひろがりました。江戸初期の文化人、松花堂昭乗による《三十六歌仙書画帖》でも、歌作りに悩んだり、色目をつかったりする人間くさい歌仙が描かれます。

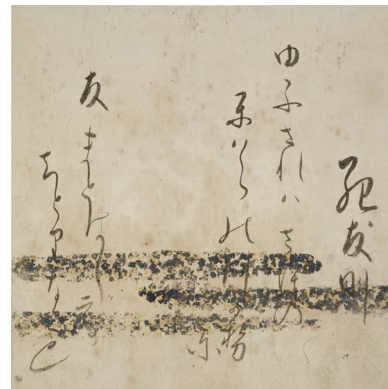
寛永の三筆の一人に数えられた松花堂の流麗な書の和歌はそれぞれの歌人の代表歌。あわせて鑑賞すれば味わいもひとしおです。



《三十六歌仙書画帖》松花堂昭乗 江戸・元和2年（1616） 柿本人麻呂



同 伊勢



同 紀友則

2. ものかたる絵

◇絵巻 ―ことばと絵でつむぐ物語

古来、語り読み継がれてきた物語は、古くから絵巻物など絵画と深い関係にありました。

「語り」のことばどおり、物語文学は当初、音読して聞かせることが中心だったともいわれます。巻物に描かれた絵をみながら、耳と目でその世界を味わっていたのでしょう。

多くの場合、詞書と絵が交互に現れる絵巻物は、作り手ではなく、受け取る側の巻き広げるという動作が加わってはじめて物語が展開します。時には読み手や鑑賞者の心情にあわせ、緩急自在に物語が進行したことでしょう。

本展では、中世の宮廷絵師による活気ある説話絵巻《是害房絵巻》（重文）と、日本最古の物語を題材とする江戸時代の華麗な《竹取物語絵巻》という対照的な絵巻をみることができます。



《是害房絵巻》 南北朝・14世紀 重要文化財

唐土からやってきた天狗の是害房が比叡山で大暴れ！けれども高僧の法力を前にあえなく敗れた是害房を日本の天狗が緊急搬送中。詞書だけでなく、マンガの吹き出しのようにそれぞれの台詞が書き添えられています。口々に嫌みを言いつつも、日本の天狗たちは面倒見がよいようです。宮廷絵師による的確な画技で、空想上の烏天狗の活躍がユーモラスに表現されています。



《竹取物語絵巻》江戸・17世紀

日本最古の物語とされる竹取物語。竹取の翁のもとで美しく成長したかぐや姫の無理難題に危険を冒す求婚者たち。しかし最後には月世界から迎えがやってきます。上質な絵具、惜しみなく用いられる金砂子。作者は不明ながら豪華な絵巻は大名家の婚礼道具などとして制作された可能性があります。

2. ものかたる絵

◇三大物語屏風 伊勢／源氏／平家 ーー人気の名場面集

平安時代から鎌倉時代にかけて多く生まれた王朝物語や合戦物語のなかでも名作として特に近世に人気のあった三つの物語。この時代には名場面を選んでバランス良く構成したり、画面いっぱいにクライマックスを描き出すなど、屏風という大画面の特徴を生かした視覚効果の高い物語絵が多く生まれました。この時代に活躍した画派は、創意を尽くして優れた物語絵屏風を遺しています。当館には、画題はもちろん、画派も構成も異なる三作例がそろっています。三者三様のアプローチを比較しながらご覧ください。



《平家物語・大原御幸図屏風》 桃山・16世紀



《源氏物語図屏風》 江戸・17世紀



《伊勢物語図屏風》 宗達派 桃山～江戸・17世紀



2. ものかたる絵

◇心なしか、俗っぽい源氏物語絵

『源氏物語』五十四帖のうち「桐壺」「若紫」「紅葉賀」「絵合」「葵」「胡蝶」など12場面を金雲で区切って描いています。その配置は物語の流れには必ずしもそわず、むしろ季節や内容など、画面全体として見たときのバランスに配慮されています。

細部の描写も時として原文に忠実とはいえないものの、形式的に表現されがちな古典文学の登場人物を生身の人間としてとらえているようです。時として野卑な表情をみせる人物描写といい、車争いの迫力ある乱闘シーンといい、この画家が本来、風俗画を得意としたことが想像されます。窃視（垣間見）や盛大な行事など通俗的な関心をそそる場面が主に選択されていることも同様です。その描写は江戸初期の風俗画の名手岩佐又兵衛（1578-1650）に近く、又兵衛晩年の工房作と目されています。この源氏絵も、この時代の好みに応えた結果といえるかも知れません。



《源氏物語図屏風》 江戸・17世紀

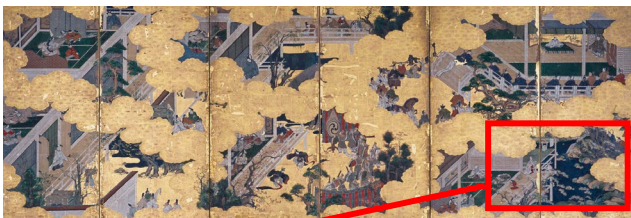
～葵～

賀茂祭の見物で賑わう大路。六条御息所の車を葵の上の一行が押しのける。物語中の数少ない荒々しい場面、ここぞとばかりに画家も力を入れたようで、大乱闘になってしまいました。本来隠されるべき高貴な六条御息所の姿を牛車からのぞかせるあたりは、サービス精神も過剰というべきかもしれません。



～若紫～

北山の僧庵で雀を追う少女を垣間見る光源氏。少女は成長して源氏と結ばれる。運命の出会いの場面では貴公子もクールではられないようです。



会期中の催し

別途入館料が必要です。予約制、先着順。

受付開始：5月10日（水）11時より 電話075-771-6411 または当館ホームページにて

特別企画

「京ことばで楽しむ源氏物語図屏風」 女房語り 山下智子

7月3日（月）14時30分開演 会場：企画展示室 定員：30名

参加費：2,000円

女房の視点から綴られる源氏物語。目の前の屏風に散りばめられた名場面を、いにしえの心を受け継ぐ京ことばで語ります。目と耳で物語の魅力に触れる優雅なひととき。

スライドトーク

6月17日（土）、7月1日（土）「歌と物語の絵」泉屋博古館学芸部長 実方葉子

6月24日（土）、7月8日（土）「中国青銅器の時代」泉屋博古館学芸員 山本 堯

14時～15時 会場：当館講堂 各定員：50名

基本情報

展覧会名 歌と物語の絵 一雅やかなやまと絵の世界

会 期 2023年6月10日（土）－7月17日（月・祝）

開館時間 10時～17時 ※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日

入 館 料 一般800円 高大生600円 中学生以下無料
※本展覧会の入場料で青銅器館もご覧いただけます
※20名以上は団体割引20%、障がい者手帳ご呈示の方は介添者一名まで無料

会 場 泉屋博古館 〒606-8431 京都市左京区鹿ヶ谷下宮ノ前町24

<https://sen-oku.or.jp/kyoto/> TEL：075-771-6411

交通アクセス 京都市バス

JR・新幹線・近鉄電車「京都駅」／京阪電車「三条駅」から5系統

阪急電車「烏丸駅」から32、203系統

地下鉄烏丸線「丸太町駅」から93、204系統

5、93、203、204系統「東天王町」下車、東へ徒歩200メートル

32系統「宮ノ前町」下車すぐ

地下鉄

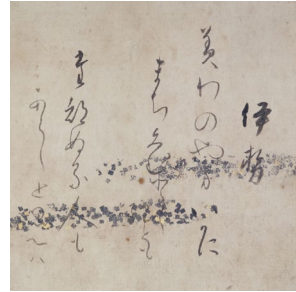
東西線「蹴上駅」から徒歩約20分

主 催 公益財団法人泉屋博古館 京都新聞

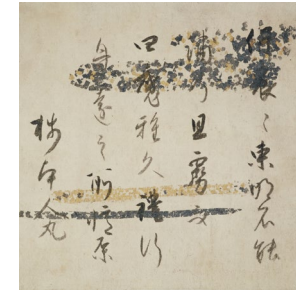
後 援 京都市 京都市教育委員会 京博連 公益社団法人京都市観光協会 **NHK** 京都放送局



①《源氏物語図屏風》江戸・17世紀



②《伊勢物語図屏風》宗達派 桃山～江戸・17世紀



⑥《三十六歌仙書画帖》松花堂昭乗 江戸・元和2年（1616）
上：伊勢 下：柿本人麻呂



③《平家物語・大原御幸図屏風》桃山・16世紀



⑦《柳橋柴舟図屏風》江戸・17世紀



④《竹取物語絵巻》江戸・17世紀



⑤《是害房絵巻》南北朝・14世紀 重要文化財



⑧《扇面散・農村図屏風》（右隻）江戸・17世紀

広報用画像申込書

泉屋博古館 広報担当行き
TEL：075-771-6411 FAX：075-771-6099 E-mail：pr-kyoto@sen-oku.or.jp

本展覧会について広報媒体へ掲載、取材をいただく場合、以下の作品画像をデータでお貸出しいたします。申込書ご希望の画像に ☒ を付し、FAXまたはメールにてお申し込みください。

	作品名	制作年代
☐	①《源氏物語図屏風》	江戸・17世紀
☐	②《伊勢物語図屏風》宗達派	桃山～江戸・17世紀
☐	③《平家物語・大原御幸図屏風》	桃山・16世紀
☐	④《竹取物語絵巻》	江戸・17世紀
☐	⑤《是害房絵巻》重要文化財	南北朝・14世紀
☐	⑥《三十六歌仙書画帖》松花堂昭乗 伊勢 ・ 柿本人麻呂	江戸・元和2年（1616）
☐	⑦《柳橋柴舟図屏風》	江戸・17世紀
☐	⑧《扇面散・農村図屏風》（右隻）	江戸・17世紀

●御社基本情報

媒体名（URL）：
発行日／放送日：
御社名：
ご担当者名：
電話・FAX・E-MAIL：

●招待券希望枚数： 5組10名 10組20名 ばら（ 枚）
（送付先住所： ）

※お貸出しする画像データは本展覧会終了をもって使用期限とさせていただきます。
※情報確認のため、お手数ですが校正原稿を当館へお送りください。原稿確認を行わず誤った情報が掲載された場合、当館では責任を負いかねます。
※広報用画像の掲載には、各画像のキャプションとクレジットの明記が必要です。
※アーカイブのため、後日、掲載誌（紙）、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。
※作品の画像を1点以上ご掲載の上、本展をご紹介くださる媒体に対し、本展招待券を読者プレゼント用に提供いたします。招待券希望枚数を明記してください。

〔問い合わせ先〕 泉屋博古館 広報担当課長 坂井さおり pr-kyoto@sen-oku.or.jp
学芸部長 実方葉子
〒606-8431 京都市左京区鹿ヶ谷下宮ノ前町24 電話 075-771-6411 FAX 075-771-6099